

随想

下妻物語

(株) P P Q C 研究所 加藤 宏光

下妻物語というタイトルの映画があった。もともとは、嶽本野ばら著の『下妻物語 ヤンキーちゃん』とロリータちゃん、小学館、二〇〇二年を二〇〇四年に深田恭子と土屋アンナを主役として映画化したものであった。公開は二〇〇四年五月である。

二〇〇四年といえば、業界生活の長い方なら『あゝ』と思いがたである。そう！

七九年振りに強毒型鳥インフルエンザが鶏で発生した年である。二〇年も前のことで、若い人々にはわからないであろうが、一九九八年に香港で発生して以来世界的にセンセーションを引き起こしたこの重大事に比べて、それなりの歳を経ている著者にとって『下妻物語』は影

が薄かった。

当時、著者にとって大事な方の農場があった下妻市の名前を冠したこの映画は、その地名のインパクト故に頭に残っていたに過ぎない。

その後、マスコミ等を介して『深田恭子』という若い女優の名を聞くことが多くなり、何となくこの映画のことが気にはなっていた。

ホンの最近になって Zeebox で『下妻物語』を見つけて、見てみよう、という気になったものである。そうはいっても、一気に見終わってわけではない。

深田恭子がロリータファッションで頑張っている、世代のあまりに異なる著者にとっては異次元で、浮いた話としか感

じられないため、なかなか観る気が続かない。

ストーリーの最初の部分で挫折すること数回、共演する宮迫博之の好演(?)も好みに合うキャラクターでない上に、数年前の吉本興業との確執報道から、何となくうさんくさい感があつたこと等も影響したのだろうか？

三度目の正直で、頑張つて終わりまで見通おうと決めて改めて腰を据えて見たものであった。

東京代官山の創作ロリータファッションに憧れながらダメ親父にくっついて下妻へ住み着くことになった主人公・龍ヶ崎桃子(深田恭子)はロリータファッション服を買うための資金作りに、父親(宮迫博之)の作るヴェ

ルサーチの偽物をバッチ物と明言しながらネット販売する。そこへ特攻服で現れた白百合イチゴ(通称イチゴ・土屋アンナ)が現れ、偽ヴェルサーチと知りながらそれにのめり込む。

これを皮切りに、この二人の友情がいつの間にか深まってゆくというストーリーは、よくある青春・友情物語のスタイルである。

しかし、主人公龍ヶ崎桃子の個性が独特で、個人主義に徹している。干渉されたくない干渉したくない。だから友達はいらない。ロリータ服を着ている自分が大好きで、周りが自分をどう見るか等興味が無い。

こうした幼いながらクールな個性を若い深田恭子が好演している。

一方、突っ張っているイチゴは叙しがりで自分を主張するために、グループで暴走することしかない、周りから見れば鼻つまみもののダメ子である。イチゴは桃子を『自然体で自己表現できるすごいヤツ』と突っ張りながら一目置くようになる。

奇妙な取り合わせの二人は友達のような、そうでもないような関係で付き合う。そして、桃子の悩みを聞くため族の集会を抜けたイチゴがケジメを付けるためリンチを受ける羽目になり、それを知った桃子はロリータファッションのまま、イチゴを救うために、族の集会へ飛び込む。後は筋書きどおりに二人が勝ち、帰路ではあれほど一人にこだわっていた桃子が、イチゴとの友情を心から受け入れる。『筋から見れば、昔からある青春友情物語で、ロリータ娘と族の取り合わせが、独特の空気を醸している』といってしまう。しかし、桃子を演じる深田恭

子のクールさが際立ち、土屋アンナのイチゴが突っ張っているが一人が寂しいという個性を引き立てている。桃子は、特攻服のイチゴがどのような突っかかって『一人である自分』を崩さない。一人でいることに孤独を感じないのは、ロリータファッションに浸っている自分に陶酔しているからである。

桃子は刺繍が得意で、訳あつてどうしても必要というイチゴのために、引退する族の長のために特攻服に特別の刺繍を施すことになる。その経緯自体が桃子とイチゴが友情を醸す誘因となるのである。この刺繍がイチゴに桃子への借りを強く意識させ、また自分を確立している桃子に尊敬の念を抱かせることになる。

その後彼女の刺した刺繍が、桃子の崇拝するカリスマロリータ衣装デザイナーの眼にとまり、彼のデザインになる服への刺繍を依頼される。かのデザイナーのカリスマに圧倒された桃子は思ふような刺繍ができなく

なり、期日に追われながら刺せない自分をどんどん追い込んで行く。思い余った桃子は初めてイチゴに助けの電話を入れる。イチゴは命より大事な族の集会をサボって桃子の相談に乗る。イチゴの単純な発想に救われた桃子は自分を取り戻して、カリスマデザイナーのロリータ服への刺繍を仕上げ、その出来栄を尊敬するデザイナーに大いに評価される。

一方イチゴは、サボった集会のケジメを付けるためのリンチの場へ出向く。ケジメの意味も知らない桃子に『族のいうケジメとは何か』を教えるのが宮迫博之のダメ親父と、樹木希林のお婆ちゃん！

ケジメで命を落とすことも厭わず自分の悩みを聞きに来てくれたイチゴを救おうと、桃子はお婆ちゃんに乗っていた伝説の原付で、リンチ場所へ駆け付ける。そこからの修羅場で、お嬢様の桃子が突然族も驚く変身、イチゴを救う……というストーリーである。

昔からあるパターンモノの青春活劇の女性版である。最初はついて行けない、面白くないと思ひ、何度も挫折していた。しかし深田恭子のいわゆる『ブツツ』ぶりがいかにも板についていたことや、土屋アンナのツッパリに慣れ始めたころ、登場者に感情移入してかワンパタンのストーリーを追いつめた自分には驚いた。

そして見終わったとき、現代つ子の心理に、著者の若かったころと同じ自己主張や友情があることを感じた。

『いつの時代も人の心根は変わらない。ただ、その時々で表現方法が変わっているだけなのだ』と実感した。過日、農場巡回の折に、若いスタッフと打ち解けながら食事をしたことがある。彼の言葉うちにも『自分を表現できない世の中に、どうして当たって行けば良いのか?!』と悩んでいる気配を感じた。先人として若い人々への道標を示して行ければそれが幸いなのであろう。